第 47 回定期演奏会

水星交響楽団

指揮　齊藤栄一

グスタフ・マーラー　Gustav Mahler
「交響曲第 6 番」Symphonie Nr.6
モーリス・ラヴェル　Maurice Ravel
「スペイン狂詩曲」Rapsodie espagnole

47th Regular Concert

2012.10.21 Sun　13:30 開演
すみだトリフォニーホール 大ホール

ご挨拶

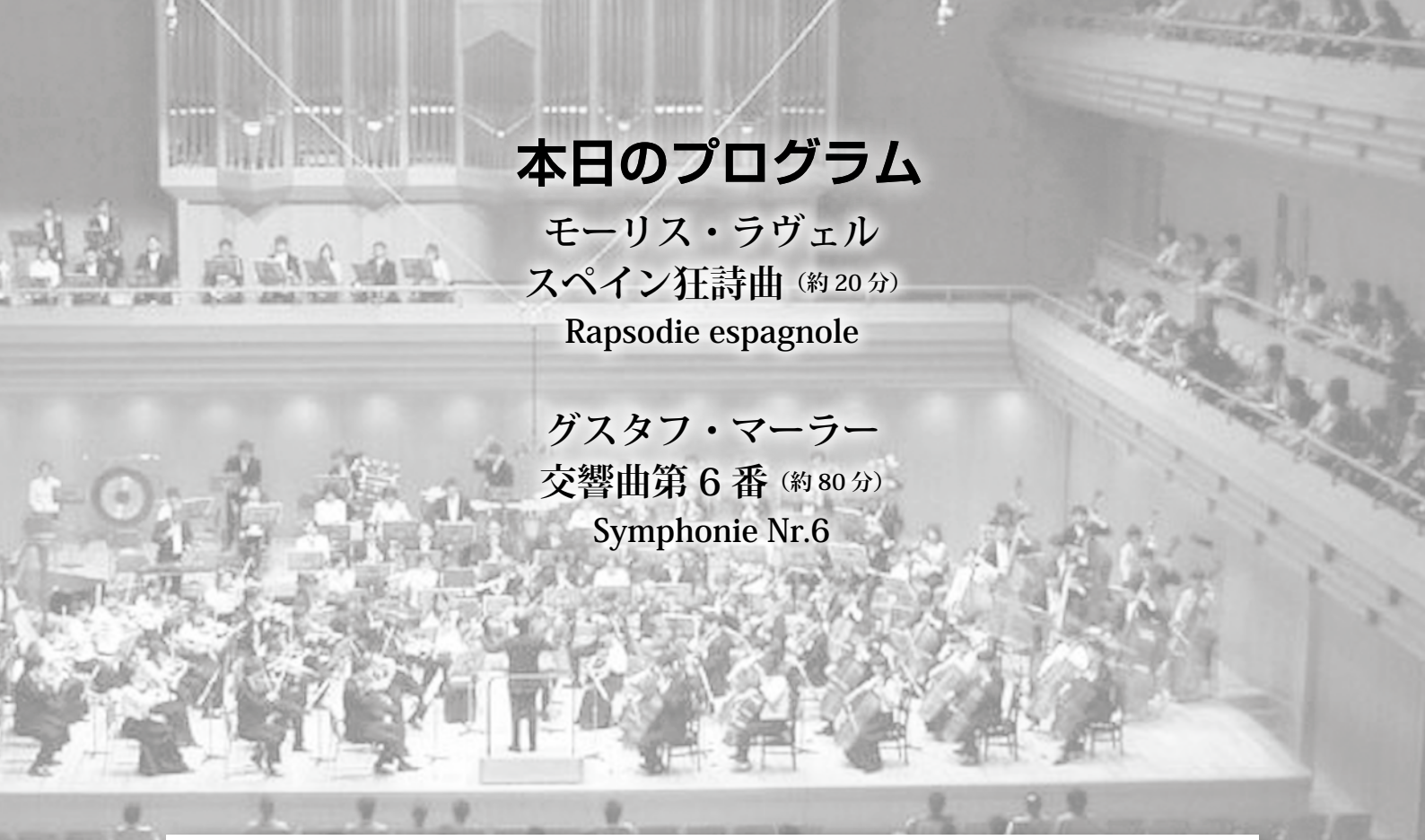
本日はお忙しい中、私ども水星交響楽団（略称：水響）の演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます。

さて、今回は、前半に、フランスを代表する作曲家ラヴェルの「スペイン狂詩曲」そして、後半には、一昨年・昨年とメモリアルイヤーだった（生誕 150 年・没後 100 年）マーラーの「交響曲第 6 番」を演奏致します。当団の演奏会に何度かご来場いただいた方にはお分かりかと思いますが、この 2 人の作曲家は、当団の嗜好とよほど合うのか、忘れたころになると必ず取り上げる作曲家でして、48 回の定演のうちラヴェルは 7 回、マーラーに至っては実に 12 回も演奏されております。今回の 2 曲も、いずれも 2 回目の演奏となりますが、それぞれ 20 年ぶり・15 年ぶりということもあり、好きなだけではもちろんすぐにさらさらと演奏ができるわけではもちろんなく、山越え谷越えで、ようやく本番を迎えることができた次第です。

スペイン狂詩曲は、オーケストレーションの魔術師と呼ばれるラヴェルが書いた実質的に最初の管弦楽作品ですが、若書きとはいえ既に独創的なアイデアに満ち溢れた名曲です。スペインにほど近いバスク地方に生まれた彼は、スペインに因んだ曲を多数残しましたがその中でも最も色彩感に富んだ作品であると私は感じます。また、マーラーの 6 番は、声楽を伴わない彼の交響曲では最大の編成でありながら、伝統的な 4 楽章構成を持ち（第 1 楽章には提示部の繰り返しまであります）一見「古典への回帰」という装いを見せますが、そのオーケストレーションはまさしく時代の最先端を行くものです。4 楽章で使用されるハンマーはその最たる例ですが、チャイコフスキーがバレエ「くるみ割り人形」で初めて管弦楽曲内で使ったチェレスタという楽器を、交響曲の分野ではこの曲で初めて使用されたという事実も忘れてはいけないと思います（その使い方は対照的としか言いようがないくらい異なりますが）。

大管弦楽を縦横に活用した 2 人の天才の作品、その妙技を味わっていただけるような演奏ができればと団員一同願ってやみません。それでは、ごゆっくりお聴きください。

水星交響楽団　運営委員長
植松　隆治



本日のプログラム

モーリス・ラヴェル
スペイン狂詩曲（約 20 分）
Rapsodie espagnole

グスタフ・マーラー
交響曲第 6 番（約 80 分）
Symphonie Nr.6

指揮
齊藤　栄一
（さいとう　えいいち）

京都大学にて音楽学を、国際基督教大学大学院にて美術史学を研究。この間、指揮法を尾高忠明、田中一嘉、円光寺雅彦の各氏に師事。1981 年には京都大学交響楽団と 2 週間に渡り、ドイツ、オーストリアにて演奏旅行を行い、ザルツブルグ音楽祭などにて指揮。82 年には関西二期会室内オペラ・シリーズ第 9 回公演、ブリテン作曲「ねじの回転」（関西初演）の副指揮者を務める。

84 年に水星交響楽団の常任指揮者に就任。水星交響楽団、オルフ祝祭合唱団との共催で、佐多達枝振り付けのバレエ「カルミナ・ブラーナ」（95 年、東京文化会館）、「ダフニスとクロエ」（99 年、新宿文化センター）を指揮した。その後、「カルミナ・ブラーナ」のバレエ公演では、神奈川フィル、東京シティ・フィルも指揮している。2005 年には、同曲を含むオルフの「トリオンフィ」3 部作（4 台のピアノと打楽器）を指揮している。

明治学院大学文学部芸術学科教授。著書に「往還する視線 14－17 世紀ヨーロッパ絵画における視線の現象学」（近代文芸社）、「振っても書いてもしょせん酔狂」（水響興満新報社）がある。

水星交響楽団

1984 年に一橋大学管弦楽団の出身者を中心に結成。バルトーク、ストラヴィンスキー、プロコフィエフ、ホルストなど大編成の曲の熱気あふれる演奏に定評がある。中でも、マーラーとラヴェルは得意にしており、過去の定期演奏会では、それぞれ 8 曲ずつ取り上げている。マーラー「交響曲第 6 番」は 96 年の 20 回定期（オーチャードホール）でバーンスタイン「管弦楽のためのディベルティメント」と共に演奏して以来、「スペイン狂詩曲」は 92 年の 15 回定期（立川市市民会館）で「ボレロ」「ラ・ヴァルス」、ベートーヴェン「田園」と披露して以来の再演となる。

曲目紹介 1

モーリス・ラヴェル
スペイン狂詩曲

Maurice Ravel
Rapsodie espagnole

「狂詩曲」とは、叙事的で民族的な内容を持つ自由な楽曲。ラプソディの訳語。
リストの「ハンガリー狂詩曲」に始まり、「ノルウェー狂詩曲」（ラロ）、「スラヴ狂詩曲」（ドヴォルザーク）、「アメリカ狂詩曲」（ディーリアス）、それからもちろん「日本狂詩曲」（伊福部昭）、他にも世界各国の狂詩曲が書かれています。

モーリス・ラヴェル（1875 ～ 1937）はフランスの作曲家ですが、母親がバスク人であったことからスペインを題材にした曲を幾つか書いており、例えば代表作であるバレエ音楽「ボレロ」も、セビリアの小さな酒場で、舞台上の踊り子と周囲の客たちが踊りながら次第に熱狂していく様子を描いています。ラヴェルが最初に書いた本格的な管弦楽曲が今回演奏する「スペイン狂詩曲」であり、やはり彼のスペインへの親しみ・興味の深さは格別であったようです。

「夜への前奏曲」静かで幻想的な夜の情景

＜第 1 曲：夜への前奏曲＞

絶えることなく繰り返されるＦ‐Ｅ‐Ｄ‐C# の下降音形が、気怠く少しミステリアスな南国スペインの夜の空気を醸し出しています。静かな曲調でありながらそこここに妖しい予兆が散りばめられており、流れ星のように現れるクラリネット・ファゴットそれぞれの Soli は印象的な和音を響かせます。

＜第 2 曲：マラゲーニャ＞

冒頭、コントラバスのピチカートで雰囲気は一変、南部マラガ地方に伝わる民謡舞曲「マラゲーニャ」の始まりです。カスタネットやタンバリンが 3 拍子の特徴的なリズムを盛り上げ、その頂点ではトランペットが「まさにスペイン！」と言いたくなる情熱的な旋律をこれでもかとばかりに歌い上げます。そして昇りつめた直後、静寂の中でイングリッシュホルンの切ない高音が鳴り、冒頭のピチカー

トが一瞬姿を見せたところで煙に巻くように曲が終わります。

＜第 3 曲：ハバネラ＞

3 曲目のハバネラは、ラヴェルが 2 台のピアノのために書いた「耳で聴く風景」の第 1 曲をオーケストラ用に編曲したものです。ゆったりした三連符のメロディがオーボエ・ホルン・2 台の独奏ヴァイオリンと様々な音色で漂い、深い霧の中を思わせます。

＜第 4 曲：祭り＞

終曲は遂に祭りです！　ピッコロの 16 分音符が始まりの予感で胸をそわそわさせます。興奮の波が何度か行きつ戻りつした後、シンバルが高らかに鳴り響き、祭りの幕開けです。
漆黒の夜空に満天の星、おいしい料理とお酒、賑やかなお喋り、そんな華やいだ空気が余すところなく表現されています。中間部ではイングリッシュホルンとクラリネットの妖艶な旋律も聴かせつつ、再びざわめきが始まると後は最後までノンストップ、一気に駆け抜けた高揚が夜空に解き放たれます。

「祭り」華やかな舞の高揚が夜空に解き放たれる

曲紹介は以上の通りですが、この場をお借りして個人的な思い出をお話ししても宜しいでしょうか。

10 年前の高校生だった頃、私のいた吹奏楽部では夏のコンクールにこのスペイン狂詩曲の第 4 曲「祭り」を選曲しました。残念ながらコンクールメンバーの選考に漏れた私は、練習場だった体育館の隅で、始まりのピッコロが鳴るのを息を潜めて聴いていました。冷房のない閉め切った体育館の熱いムッとした空気と、曲の持つ異様な高揚感が相まって、なんだか幻想的な練習風景だったことをよく覚えています。熱狂の渦中にいる他の部員がとても羨ましかったこともまた、忘れられない思い出です。

今回その「スペイン狂詩曲」の、しかもイングリッシュホルンを担当することが決まった時は、その重責を感じる前に純粋に嬉しい気持ちで一杯でした。まさか、本番 2 か月前を切って急遽仕事の予定が入ろうとは思ってもみなかったものですから・・・。

という訳で大変残念ながら私は今日この日、演奏に参加することができません。しかしこうして曲紹介を書かせていただき、10 年前より一歩、この曲に近づけたかなと考えております。

私たち水星交響楽団は、第 1 回定期に「マ・メール・ロワ」を選曲、第 15 回定期で「スペイン狂詩曲」「ラ・ヴァルス」「ボレロ」のオールラヴェルプログラムを演奏して以来、大好きなラヴェルの曲を頻繁に取り上げてきました。

本日もご来場いただいたお客様と一緒に煌びやかなラヴェルの世界を感じられますこと、団員一同心より楽しみにしております。

（山下芙由子）

写真のモデル・フラメンコダンサー平富恵さんの公演『El Sueño IV』は、
10 月 28 日 (日)　18 時より日本橋三井ホールにて開催されます。

曲目紹介 2

グスタフ・マーラー
交響曲第６番

Gustav Mahler
Symphonie Nr.6

乱れた歩調のマーラー交響曲第６番解説

「人間は絶えざる自己超克を運命づけられた苦闘的存在である」埴谷雄高

軽いジャブの応酬から対話は始まる

客　：どうも、お久しぶりでやんす。
主人：これはまた懐かしいね。どういう風の吹き回しだい？
客　：いえ、あなたが７度目のマーラー交響曲第６番「悲劇的」（以下マラ６）演奏をされると聞いたもんですから、ちょいとこの曲についてお話を伺おうと思いまして。
主人：そんなに僕がマラ６に詳しいと思ったかい？そりゃ随分光栄だな（喜）。
客　：いえね、和尚さんにこの話をしたら「下手な鉄砲も数撃ちゃ当たるという言葉もある。あいつもこの曲について知るに至ったことが一つ位はあるのではないか。一度ダメもとと思って聞いてみなさい」って仰るもんですからね。
主人：本人を目の前にして「下手な鉄砲」だの「ダメもと」もないだろう。そりゃ随分失礼だな（怒）。
客　：あれ、聞いてましたか？
主人：誰と話してるんだよ。
客　：そう言われてみると、ちょいとおかしな話ですね。

交響曲第６番について

主人：ちょいともなにもあるもんか。聞きたいのは何だ？さっさと言えよ！
客　：いくらマラ６の曲調に合ってるからって、そう喧嘩越しになっちゃ困りやす。まず聞きたいのはですね、この曲は「悲劇的」という副題がついてますけど、マーラーの人生の中で一番幸せな時期に書かれたものなんですよね？
主人：一応調べては来てるんだな。
客　：あたり前田のクラッカー！といえば藤田まことですけど、藤田まことって、マラ６、７、大地の歌、９のベルリン

初演者、マーラー交響曲全曲の史上初録音者であるオスカー・フリートに似てますよね？

主人：顔が長いってとこ以外似てないんじゃないのか？フリートって指揮者になる前は、サーカスの道化師や犬のブリーダーもやってたらしいね、って何の話をしてるんだよ？！大体ある年齢以上じゃないと、あたり前田＝藤田まこと分かんないし。

客　：そうそう、脱線は抜きでお願いします。しっかりしてよ、ホントにもう！

主人：最初に脱線したのはどっちだよ！確かにヴィーン宮廷歌劇場の監督の座をがっちりと掴み、ヴィーンで最高の美貌と教養と芸術的感性を兼ね備えたアルマを妻とし、二人の娘も生まれて、というマラ６作曲当時の状況は、外面的には彼の人生で最も幸せな時期だったといえるだろうね。だからアルマは、マラ６はこの後暗転していく自らの運命を察知した作品だ、といっている。しかし例えば、シェイクスピアだって最も悲惨で残酷な悲劇『タイタス・アンドロニカス』と抱腹絶倒の喜劇『じゃじゃ馬ならし』をほぼ同時期に書いている。どちらかで彼が嘘をついているという訳じゃないし、どちらも傑作だ。充実した幸せな時期に悲惨極まりないマラ６を書いたからといって、それが予言的意味を持つと断定するのはちょっと決めつけすぎじゃないかな。ただ一つ間違いなくいえるのは、マラ６はマーラーの全作品の中で、抜きん出てエネルギッシュだということ。正に彼の気力・体力が最も充実したイケイケドンドンの絶頂期にあったればこそ、そのような異常としかいいようがないエネルギーとテンションから成り立っているマラ６が生み出されたという訳さ。そしてそれがこの曲の人気の秘密と言えるんじゃないだろうか。

客　：なるほどねぇ。またこの曲は編成が大きいですよね。

主人：そうなんだよ。管弦楽だけでいえば、「千人の交響曲」と呼ばれるマラ８よりもマラ６のほうがよほど巨大な編成になっている。管楽器の数もそうだし、何より打楽器群が膨大で、定番打楽器に加え、むち、鐘、シロフォン、銅鑼、ウッドクラッパー、カウベルなどがぶち込まれ、さらに究極の新楽器ハンマーがフィナーレで炸裂する。

客　：出たっハンマー！！今日の舞台でもひときわ異彩を放ってます。ハンマーの話は是非楽章ごとのお話で詳細をお願いしますよ。

第一楽章
－軍隊行進曲、アルマの主題、エアポケット

客　：第一楽章は、暴力的とさえいえる荒々しい軍隊行進曲調の第一主題と華やかで情熱的な第二主題が非常に強烈な対比をなしていますね。

主人：確かに荒々しいんだけど、いつものマーラー調で第一主題部から一貫して非常に緻密な音量指定がなされている。分からなくて聴いていても充分楽しめるが、スコアを読み込んだ人が聴くと、マーラーの中でこの曲位、オケが曲のことを分かって弾いているかどうかが一目瞭然な曲もないんじゃないだろうか。第二主題については・・・

主人の妻：あなた！！リフォームの件でグロピウス建設の方がお見えよ。ちょっと応対して頂戴！

主人：あれ、アポイントは今日だったかな？（一時退場）

主人の妻：ちょっとお話を小耳に挟んでいたんですけど、私もマーラーは夫に負けず好きなんですよ。第二主題は「アルマの主題」と呼ばれておりますのはご存知でしょ？マーラー自身が妻アルマに対して、この主題でお前を描こうと思った、って言ったそうですわ。天駆けるような情熱的な主題が愛する妻を現したものだなんて、なんてロマンティークなんでしょ。さ、お茶でも淹れてまいりますわ（退場、入れ替わりで主人戻る）

客　：奥様も中々ジェンダー目線のマーレリアンですね。この楽章の展開部は随分

と変わったものですよね。

主人：いやそうなんだ。普通のソナタ形式におけるような展開部と違い、中盤でいきなりそれまでの音楽と全く関係のない異世界（エア・ポケット）に落ち込むような不思議な箇所が始まる。そこはカウベルが鳴り響き、放牧された牛たちがゆったりと暮らす、霊気漂う高山の絵姿だ。全く脈絡のない異物が外観上がっちりしたソナタ形式に忍び込む辺り、マーラーの戦略的な非論理性とでもいうべき狙いが見事にキマっているね。

第二楽章という言葉が何を現しているか

客　：あまり詳しく聞いていると終電に間に合いませんので、ちょいと駆け足で。続いて第二楽章ですが、最新版のスコアを張り込んで買ったんですが、従来と違ってスケルツォとアンダンテが入れ替わって、アンダンテが第二楽章なんですね。

主人：そこがこの曲の演奏をめぐる一番厄介なところでね。確かに今回は最新校訂版のスコアに基づいて演奏するんだが、楽章順はちょっと前までの慣例通り、第二楽章にスケルツォ、第三楽章にアンダンテという順番で演奏するんだ。

客　：そりゃまたなんで？**おかし～やないかぁ～**

主人：文章で大木こだまのマネしても分かんないって！

客　：**往生しまっせぇ～**

主人：押すね～。マーラー自身、この楽章配列には最後まで頭を悩ませていたらしく、ファイナルアンサーがどっちだったのか、よくわからない。最近の学説としてはアンダンテ＝第二楽章がマーラーの最終的な意図だったという説が有力のようだ。ただ、言ってしまえば、スケルツォとアンダンテが先に来ようが後に来ようが、それぞれそれなりには納まるのであって、あとは現場判断に任せてもらった方がアウトプットはいいものになると思うんだけどね。

客　：あなたがアンダンテ＝第三楽章派だから、そう言ってるだけなんじゃないの？

主人：ベートーヴェンの譜面について朝比奈御大も同じような事を仰ってるよ。

客　：意外とファジーなんですね。スケルツォの出だしは第一楽章に良く似てますね。

主人：ただ、いきなり冒頭から強拍をずらして、どこが小節頭だか目くらましをしたり、第二主題でも鄙びた優雅さの隙間からどぎついアクセントが蛇の舌のようにチラチラと仄見えたりと、随所に意地の悪いトリックが仕掛けまくられているね。

主人の妻：（お茶を出しながら）アルマは不安定にリズムが変わるトリオ部のことを「彼が描いたのは、よちよち歩きで砂の間を走りまわる二人の小さな子どものリズムに乗らない遊びだった。恐ろしいことに－この子どもたちの声はだんだんと悲劇的なものとなり、最後には小さなすすり泣きとなって消えてゆくのだ（村井翔訳）」と言ってますわ。偉大な芸術家は自分の将来の不幸（長女の夭逝）をも予感し得るんですね。（退出）

主人：（苦々しげに）第二楽章は次女が生まれる一年前に完成してるんだ。「二人の子ども」が走りまわる姿の描写の筈はないよ。もしそこまで透視して書いてるんだとすれば、それこそマーラーは大した予言者という訳だ。

第三楽章－これは「男塾」塾歌なのか？

客　：皮肉な言い方かも知れませんけど、アンダンテは分かりやすいというか、マーラーのひねくれ・・おっと失礼、複雑で深遠な世界をよく理解出来ない人の心にもすっと入ってきますね。

主人：実に自然に悲しみや慈しみの情、そして終盤の激情が心に迫ってくるね。第一楽章展開部のエアポケットでは「遠いところで（舞台外で）」鳴り響いていたカウベルが、ここでは舞台上で鳴り響く。つまり第一楽章はまだ「彼岸」は彼方にあったけれど、この楽章では

とうとう主人公（＝英雄）が「彼岸」に到達したかのような印象をいだくね。しかし後半音楽が暗転し、悲劇的感情が頂点に達した時、カウベルは安らぎとしてではなく、断罪の宣告であるかのように暴圧的に打ち鳴らされ、「彼岸」と思っていた場所は決して永遠の安息の場所でなかったという残酷な現実に直面する事となってしまうんだ。

客　：となると終盤は悲しみをかきくどくような大悲劇に至るんで？

主人：ところがこれだけの悲惨に直面してもなお、音楽は烈しく泣き崩れる事なく、悲しみに耐え抜くように美しく力強く謳いぬき、嫋々たる余韻を残しつつ消えていく。突然だが、僕が偏愛してやまない漫画に『魁！！男塾』というのがあるんだがネ、そこに出てくる熱すぎる男塾の塾歌を聴いた王大人（ワンターレン）が、こう語っているんだ。

それにしてもなんという悲しい唄声よ・・・
まるで魂をひきさかれるような慟哭よしかしその悲しみの中には嵐に立ちむかっていくような力強さがある

客　：おぉ、これは正に第三楽章終盤そのものじゃないですか！！

主人：そうだろう？作者の宮下あきらが、マラ６にインスパイアされたこの王大人の言葉を思いつき、そう言わせるにふさわしい塾歌を作りだし、その塾歌にぴったりな学園を舞台にした漫画を描こうと思って『魁！！男塾』を書いたのは、ほぼ確実だ。

客　：いや、それ絶対違いますから。

第四楽章－精神の最終戦争

客　：そしていよいよ壮大無比の第四楽章が開幕ですね。

主人：マラ６の巨大すぎるフィナーレは、精神の最終戦争ともいうべき激烈なものだね。ソレルチンスキーはこのフィナーレについて「総譜のページは、文字どおり血で記されたかのような印象を呼び起こす」って言っているが宜なるかな、だ。独特の神秘的な冒頭からヴァイオリンによる決然とした一種の「枠主題」が奏されると、第一楽章にも現れ全曲を緊密に統一する運命リズムと運命和音（長３度和音→短３度和音）が現れる。長大な序奏部では暗く蠢くように進み、先程までは天上の象徴だったカウベルが場違いに、パロディックにさえ響くなど、行方が全く知れない状態が続く。

客　：この部分だけでもヴォリューム満点ですけど、まだ序奏部なんですからね。

主人：まったくだ。そこから次第に音楽が盛り上がって行くと、決然たる決戦の火蓋が切られ、ようやく提示部が始まる。激しく闘争的な主題が提示され、束の間、救いを予感させるような第二主題が現れた後、枠主題が再度奏され、ここから展開部に突入する。

客　：この展開部がまたモーツァルトの交響曲が一曲すっぽり入ってしまうくらい長いですよね。この展開部の中に、お待ちかねのハンマーも登場します。時間の関係でハンマーの数が何回であるべきかという質問は割愛しますけど、今回登場する２回は、いずれも音楽が救いに手が届きそうになる瞬間に炸裂しますね。

主人：そう、この曲の主人公である英雄（＝マーラー）が勝利を得んとする瞬間に下される鉄槌としてのハンマーは、破局の象徴としてこれ以上ない強烈なインパクトがあるね。

客　：鉄槌っていうけど、「金属的でない音で」という指定があるんでしょ。

主人：いちいち揚げ足をとるなよ。ま、この文章を書いてる奴が稀代の揚げ足取りだから仕方ないか。ハンマーは今指摘のあった「金属的でない音で」という漠然とした指示からもわかるように、具体的な形状の指定はない。各オーケストラの数だけハンマーが存在しており、大体それはハンマー担当者が工夫し自作している。今回は自ら「打王」と名乗る怪物的打楽器奏者がハンマーを担当してるだけに、本番で一体どんなハンマーが炸裂するのか、これは実に見ものだ。僕も当日ハンマーが炸裂する瞬間は指揮者やコンミスを見ないで後ろにいるハンマーを見るつもりだよ。（←コンミス、絶対嘘ですから！）

客　：あんた、この曲でコンマスしてた時、ハンマー見るために体ねじまげて後ろを見ていた姿がニコニコ動画にアップされちゃってましたがな。今度もハンマー見る方に 100 ジュドル賭けます。

主人：ジュドルって、なんで通貨単位が『北斗の拳』になってんだよ！

客　：（無視）しかしハンマーが見ものなのはよく分かりました。水木しげるの『悪魔くん』に出てくる妖怪百目よろしく全身を目にしてハンマーを網膜に焼き付けますよ。二度目のハンマーの後、圧倒的な金管のコラールが最後の審判を告げているかのような断罪すると、それが転ぶように終わってようやく再現部に移行しますね。

主人：ここでまたもカウベルが再び「遠いところから」低音の鐘と共に鳴り響く。最早それは高山の霊気ももたらさず、不気味に鳴り響くばかりだ。そんな中、第四楽章で唯一明るい音楽ともいえる第二主題をオーボエが奏すると、音楽は残る力を振り絞り再び蘇る。しかし救いである第二主題が先に再現されてしまうなら、残された第一主題が後からやってきてしまうのではないか、という恐れ通り、唯一の希望を嘲笑するように狂猛な第一主題がふてぶてしくせりあがり、遂に勝利を得られない事を確信したマーラーの、最後の最後ともいえる死に物狂いの闘争が始まる。映画『二百三高地』ラストにおいて日露両軍兵士が素手でお互いの肉にくらいつき目をえぐる凄惨な戦闘のシーンがあるが、この箇所はそういった戦場での生々しい肉弾戦さながらに血しぶきが噴きあがる。

客　：それでも何とか救いの光がさしてくるようなシーンがやってきます。

主人：ベートーヴェンの第 5 交響曲（俗称「運命」）のフィナーレ直前のような、ここを超えたら、これまでの苦労に報いる素晴らしい救済が待っている。そんな予感を抱かずにはおれない箇所だね。ところが傷ついた胸を高鳴らせながら飛び込んだ先は、闇黒の破局だった。ハンマーこそ鳴らないが、正に此処こそ「英雄」が墜死する瞬間だろうね。それが証拠にマーラーにおいて「死」を象徴するタムタム（銅鑼）と「昇天或いは天上」を意味するチェレスタがこの瞬間に同時に鳴り響くんだ。そして最後に枠主題が最強奏で演奏されるとそれを嘲笑うかのような鉄槌が下され、絶望的なコーダに至る。

客　：なんとも暗く侘びしい、金管による葬送のコラールですよね。

主人：そのコラールが静かにやんでいくと、全奏で A 音（ラ）の最強奏による、今度こそ最後のとどめの一撃（それも運命リズムに長音が消えた短３度和音のみが伴われる）が加えられ、露ほどの救いもなく、全てが終わる。

根本的な問いかけを伴うエピローグ

客　：聴けば聴くほどに、本当に救いのない恐ろしい曲ですね。さて、そろそろ僕も帰らなきゃいけないんですが、最後に一つ教えて下さい。（靴をはきながら）おや、あなたヴァイオリン奏者なのに、なんでこんなところにハンマーが置いてあるんですか。

主人：いや、ちょっと使いたい用途があってね。

客　：それはともかく、この曲は結局のところ、純音楽なのか私的メッセージなのか、どっちなんでしょうか。

主人の妻：（見送りに来て）アルマによれば、第一楽章第二主題が「アルマの主題」、第二楽章トリオは娘たちの歩み、そして終楽章は英雄マーラーの破滅を扱ってます。アルマがマラ６のことをマーラーの最も個人的なメッセージと言っているのがご質問の答えになるのじゃないかしら？（言うだけ言って奥に引っ込む）

主人：（苦々しげに）偉大なマーラー指揮者のガリ・ベルティーニは「もしもフランス革命時の十万倍のギロチンが（中略）われわれの「世界」の首を斬ってしまうとしたら・・そういった意味で、私は（ハンマーについて）ギロチンというイメージを持っています」と述べて、更に全人類の運命に関わる悲劇という視点からこそマラ６が生み出されたと述べている。これは卓見だし、正にこの曲が、より普遍的な感情を惹起させる作品であることも間違いないだろう。最後に一点だけ。音楽家は自分や家族のイニシャルを音楽に託す事がある。例えばバッハの B-A-C-H やショスタコーヴィチの D-S-C-H（ドイツ語綴字 D.Schostakowitsch の最初の 4 文字)などだ。未完に終わったマラ１０は、グロピウスとの不貞によってマーラーを絶望の淵に叩き込んだアルマへの断罪と最終的な赦しによる再生の音楽だが、両端楽章に現れる有名なカタストロフ（破滅）部ではトランペットが最強奏で A の音を絶叫する。これは前後の事情、音楽の内容からして間違いなくアルマへの愛憎を込めたメッセージであり、とすれば第６ラストでの A の音によるとどめの一撃はアルマを意味していると考える事も不可能ではない。

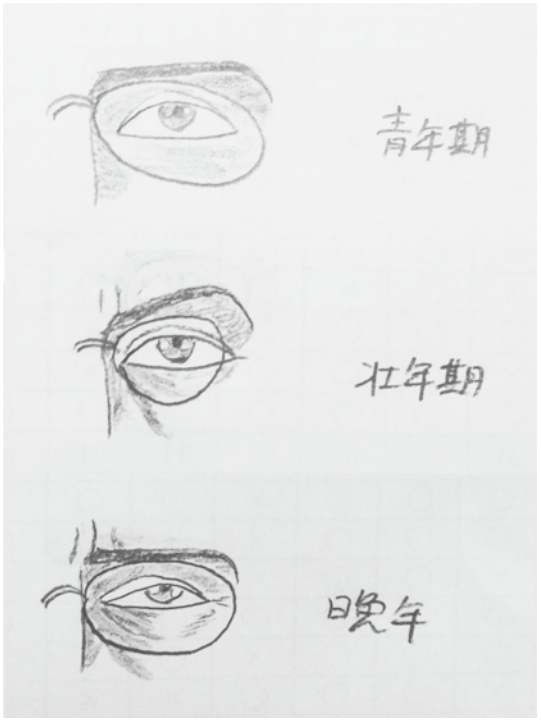
客　：それは・・どういう事です？

主人：マーラー自身たる「英雄」にトドメを刺す、決定的な最後の一撃が妻の音によるものだとするなら、恐らくは彼の下意識で、妻に対するそのような憎悪というか、恐怖というか、ことによると殺意さえ？！抱いていたのではないか。或いは更に恐ろしい、二人だけの秘密が隠されているのか？皮肉な話だが､アルマの宣伝を信じてマラ６を「彼の最も個人的なメッセージ」と解釈するならば、マーラーがアルマに対して恐ろしい観念を抱いていたというのを認めることにもなってしまうんだよ。

客　：本当に恐ろしい謎を秘めてますね。それじゃ､失礼します。(帰路独語)マーラーの「僕の第６は、聴く者に謎を突きつけるだろう。この謎解きには、僕の第１から第５までを受け入れ、それを完全に消化した世代だけが挑戦できるのだ」という言葉は、正にその通りだな。（沈黙）あそこのご夫婦、あまりうまくいっていないようだったな。（沈黙）しかし、ハンマーを使う「用途」って何だろう？（顔色を変えて）そういえば、奥さんの名前のイニシャルは A だったな。いやしかし､まさか‥（その瞬間、辞去したばかりの家から、烈しい悲鳴と「金属的でない」ハンマーの打撃音が響く）

（Vn　高橋広）

マーラー　年代別左目の変遷



水星交響楽団

◇指揮者
齊藤　栄一

◇コンサートミストレス
中里　咲子

◇第１ヴァイオリン
安谷屋　靖
生駒　陽子
伊東　陽子
上村　剛正
織井　奈津乃
亀井　亮子
鈴木　牧
高橋　広
◎中里　咲子
西沢　洋
二島　詩帆
前田　啓
宮川　妙子
宮川　雅裕
山田　悠介
米嶋　龍昌

◇第２ヴァイオリン
川原　ひかり
苦瀬　康史
黒川　夏実
小山　吉智
小林　美佳
佐塚　有美子
佐藤　千恵
祐成　秀樹
鈴木　尚志
鈴木　真由子
◎土屋　和隆
徳地　伸保
永井　翠
野村　国康
原藤　結香

◇ヴィオラ
荒瀬　俊
有井　晶
井上　拓
大木　多朗
小澤　未来
◎川俣　英男
木村　納
鈴木　陽太
古屋　圭織
三上　さやか
水上　久美
柳沢　成俊

◇チェロ
今村　文子
大川　凌弥
金澤　直人
金田　千畝
首藤　ひかり
高橋　幾多郎
橘　温子
◎東郷　丞
中山　憲一
日吉　実緒
能岡　雅人

◇コントラバス
阿部　洋介
石附鈴之介
大西　功
刈田　淳司
北畠　麻由
中川　慧音
◎福原　祥公
増田　晴夫
松岡　和男

◇フルート
川崎　裕恵
西村　かよ子
本田　洋二
横田　慎吾
横山　拓未

◇オーボエ
淺井千栄子
齋藤　暁彦
白土　遼
野口　秀樹
長谷川実里

◇クラリネット
西村　伸吾
横地　篤志
賀内　洋介
藤原　誠明
馬場園　真吾

◇ファゴット
金谷　蔵人
木村　駿介
冨井　一夫
長谷川　美奈
安田　圭介

◇ホルン
伊集院　正宗
井上　清駿
島　啓
杉本　裕宣
野村　佳祐
山形　尚代
山崎　智哉
山田　玲実

◇トランペット
岩瀬　世彦
金子　恭江
桜井　新
桜井　詩織
十川　雅彦
細川　紗耶香

◇トロンボーン
小林　威之
佐々木　英王
佐藤　幸宏
福澤　親

◇チューバ
植松　隆治

◇パーカッション
椿　康太郎
山本　勲
高橋　淳
松山　若菜
鈴木　海里
芹澤　美津穂
永田　麻衣子
中崎　裕子

◇ハープ
東森　真紀子
矢澤　みさ子

◇チェレスタ
増田　麻衣子

トレーナー

木村　康人　　草川　正憲　　髙山　健児　　内藤　佳有　　林　憲秀　　古野　淳　　三橋　敦　　山田　裕治

水響運営委員会

◇運営委員長
植松　隆治

◇コンサートミストレス
中里　咲子

◇パートリーダー
フルート
横田　慎吾
オーボエ
齋藤　暁彦
クラリネット
賀内　洋介
ファゴット
冨井　一夫
ホルン
島　啓
トランペット
岩瀬　世彦
トロンボーン
佐藤　幸宏
パーカッション
椿　康太郎
第１バイオリン
中里　咲子
第２バイオリン
土屋　和隆
ビオラ
川俣　英男
チェロ
東郷　丞
コントラバス
刈田　淳司

◇インスペクター
中弦
川俣　英男
低弦
刈田　淳司
木管
横地　篤志
金管
佐藤　幸宏
打楽器
山本　勲

◇会計
黒川　夏実
今村　文子
島　啓
金子　恭江

◇楽譜
宮川　雅裕
野口　秀樹
伊集院　正宗

◇ステージマネジャー
櫻井　統
伴野　晶

◇運搬
刈田　淳司
山本　勲

◇会場
横地　篤志

◇広報
祐成　秀樹
川原　ひかり
本田　愛子
鈴木　牧

◇チケット
横田　慎吾

◇レセプション
川原　ひかり
首藤　ひかり

◇会場受付
岡本　真哉

◇ホームページ
川俣　英男

◇合宿
椿　康太郎

水星交響楽団第 48 回定期演奏会

2013 年 5 月 3 日（金・祝）
ミューザ川崎シンフォニーホール
13:00 開場・13:30 開演（予定）
シベリウス：交響曲第 7 番
ブリテン：チェロと管弦楽のための交響曲
（チェロ独奏：丸山泰雄）
ニールセン：交響曲第 4 番「不滅」

水星交響楽団第 49 回定期演奏会

2013 年 9 月 16 日（月・祝）
すみだトリフォニーホール
13:00 開場・13:30 開演（予定）
バーンスタイン：プレリュード・フーガ＆リフ
ラヴェル：バレエ音楽「マ・メール・ロワ」（全曲）
R . シュトラウス：交響詩「英雄の生涯」